

## ホッとアートプレゼント実施アンケート結果 「医療関係者」 165人

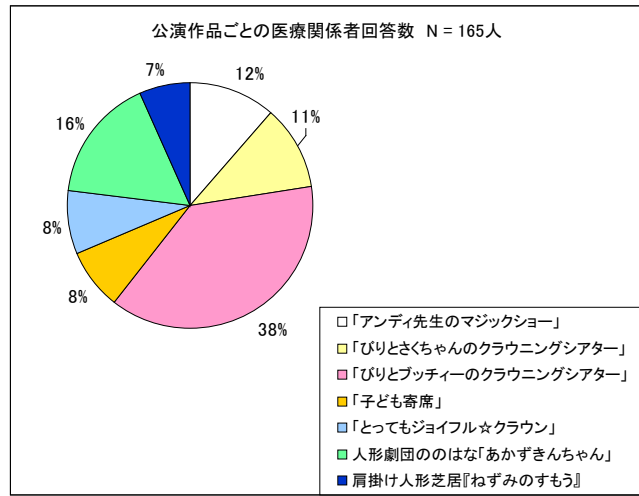
### 医療関係者の回答 165 人の内訳と特徴

医療関係者の回答数は 165 人であった。この数は、この事業に協力していただいた方々の多さと、病院を挙げて取り組んでいただいた現場を表す結果となっている。プログラム開発から 2 年目のこの事業にとって非常に貴重なデータと考える。

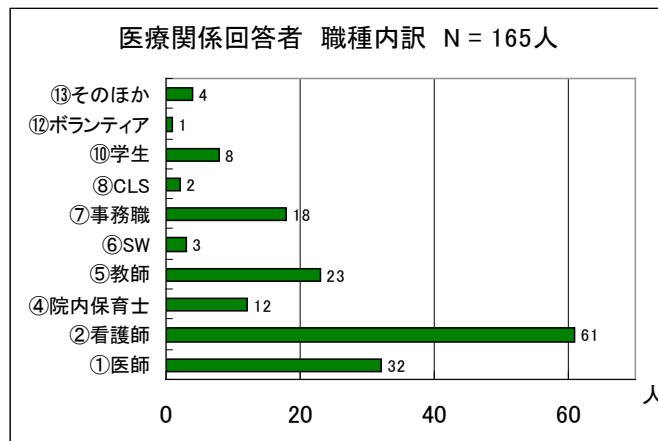
作品ごとの回収数では、「クラウン B」が 5 ステージで 38% を占める結果となった。

(この数字は参加者数ではなく、回答数であることに注意) [図-15]

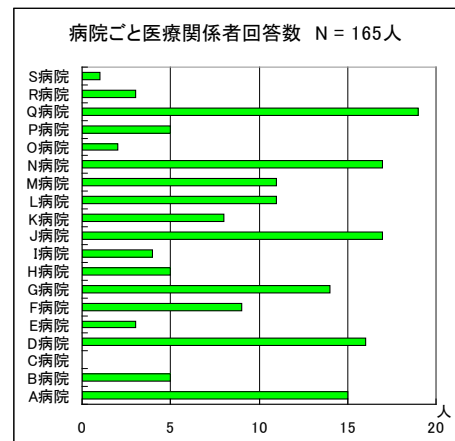
(黒が医療関係者・ピンク保護者・ブルー子ども)  
 「マジック」 4st. … 12% (19 人・40 人・47 人)  
 「クラウン A」 2st. … 11% (18 人・23 人・30 人)  
 「クラウン B」 5st. … 38% (63 人・21 人・39 人)  
 「落語」 3st. … 8% (13 人・10 人・40 人)  
 「クラウン C」 1st. … 8% (14 人・15 人・12 人)  
 「人形劇 A」 4st. … 16% (27 人・22 人・14 人)  
 「人形劇 B」 1st. … 7% (11 人・7 人・8 人)



[図-15]



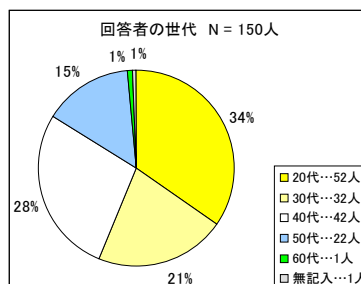
[図-16]



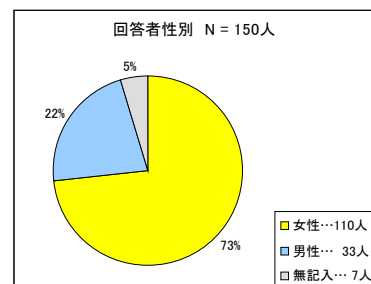
[図-17]

回答者のフェイスシートを概観すると、それぞれ病院の状況は異なるが、ホッとアートプレゼントを受け入れる現場がどのようなスタッフ構成で創られているか、概ね見えてくる。[図-16] ~ [図-19]

[図-16] は回答者 165 人の職種を集計したグラフ。病室から子どもたちが現場会場に開演時間に一人でも多く参加できるようにするには、子どもの体調管理・判断、院内各セクションの様々なルーティンを事前に準備することが必要であり、これほど多くのスタッフが現場に参加することは並大抵の事ではないはずである。内訳は「看護師」が最も多く 61 人、続いて「医師」が 32 人の回答数となっていて、私どもの「可能な限りスタッフも一緒に子どもたちと参加してほしい」という希望に添えてくださった結果が表れている。次に多い「教師」23 人は、院内学級や併設の学校との協力体制があることを示し、「事務職」12 人、「SW」3 人、「ボランティア」1 人は外部からの支援受け入れ窓口として院内の調整にもあたってくださった。「保育士」12 人、「CLS」2 人は、常に子ども目線で協力してくださった。「学生」8 人は看護学生の参加。[図-17] の C 病院は丁寧なヒアリングが行われてアンケートは割愛されたが、当日の参加は 30 名を超えている。[図-18] は、回答者の世代と性別で、以上のフェイスシートから、以下に示すアンケート結果が、現在の小児医療現場の偏りのない客観データであると推察できると思う。



[図-18]



[図-19]

医療関係者 165 人のホッとアート全体の評価は、[図- 19]であった。「とても満足」67% (110 人)、「満足」27% (44 人) で、9 割を超える医療関係者の満足が得られる結果となった。先に述べたとおり、限られた体制で重要案件が山積する現場からの評価であることを考えれば、病院にとっても必要なリソースと考えてよいのではないだろうか。またマイナス評価としては「少し不満」が 1 人で、自由記述に「子どもが興味を持つキャラクター等を使用する方が喜ぶと思う」との意見を頂いた。

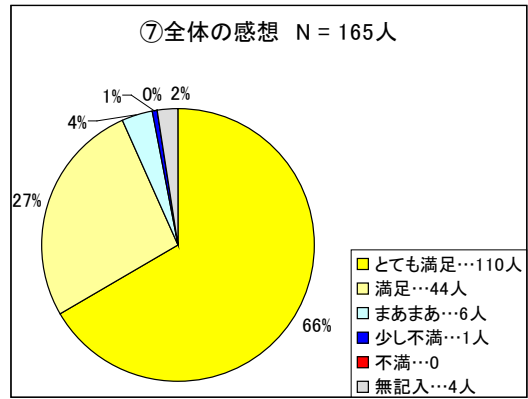
評価の細項目 [図- 21] を見ると、保護者同様、評価の第一要因は「公演内容」であった。

「招待状・ポスター」は「とても満足」44%、「会場の雰囲気」は「とても満足」57%で、共に改善の余地がある。「スタッフの対応」については、対病院スタッフ・対患児と両面あるが、コーディネーターにとって、病院はまだ未知のコミュニティーであることから、経験を積むことでよりホスピタリティを発揮できると考える。「スタッフ事前打ち合わせ」は「無記入」36%に、打ち合わせに関与してないと判断した方も含む。これを差し引いても「とても満足」は 18%で、初めての体験となる病院や院内スタッフでも、スムーズな進行ができるよう、進行スキームの情報をわかりやすく提供していきたい。

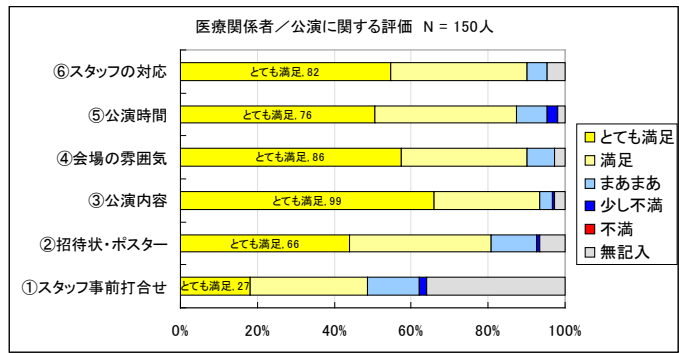
「公演時間」はプロジェクトの基本は 45～60 分を病院に提案し、病院の希望に沿って決定している。理想は、「充実した内容～フィニッシュ～心地よい解散」が規定時間内に完了することであることを今年度学んでおり、より精度を高めていきたい。

[図- 22] は、保護者への質問 [図- 13] と同一の質問を医療関係者にした結果である。保護者の場合は観察対象が「我が子」であることと、10 歳未満児に偏ることから、こちらのデータの方がプロジェクト全体の子どもたちの状況を表す。このグラフからは、「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定評価をする医療関係者の人数を確認しておきたい。7 割以上の高ポイントは、患児の状態を聞いた「楽しんでいた」93%、「プロの生公演に吸い込まれていた」90%、「元気になった」87%、「次回の公演を期待した」87%、「普段みられないワクワク感を感じていた」84%、「辛い治療を一瞬忘れられた」73.9%となっている。この評価にどれ程の価値があるのかは、それぞれの医療の現場に委ねたいと思う。

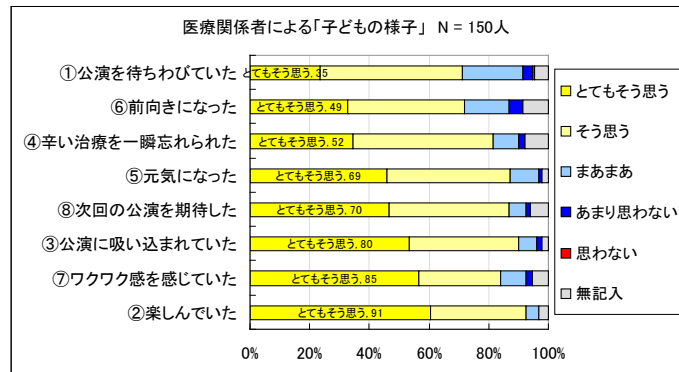
最後に [図- 23] は、回答者自身の心象と意見をたずねたグラフである。上記の価値判断をしていた際に合わせて参考にしていたらと思うが、一点、「患者の QOL 向上に役立つと思う」という項目について「とてもそう思う」が 58%、「そう思う」合わせて 88%であったことを最終評価として受け止めておきたいと思う。(分析・文責/稲垣秀一)



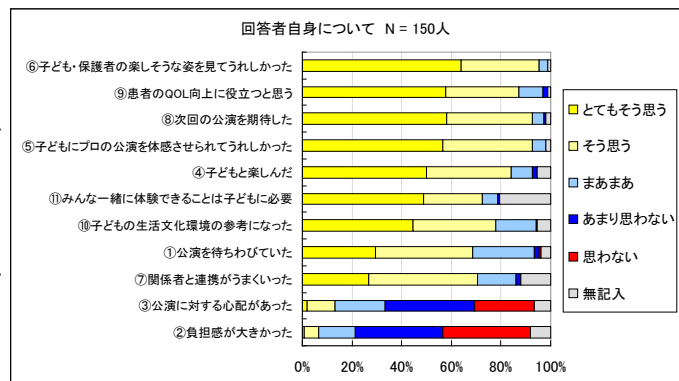
[図- 20]



[図- 21]



[図- 22]



[図- 23]